

スポーツが人格形成に与える影響

1200482 中島 悠輔

高知工科大学 経済・マネジメント学群

1. 要約

本研究では、スポーツが人間性に与える影響を明らかにし、スポーツによる良好な人間性構築方法を検討した。その結果、スポーツは人間性に様々な影響を与えていることが分かった。また、その影響には良い影響と悪い影響が存在していること、スポーツの種類や役職の有無によってもスポーツが人間性に与える影響には違いが生じることを明らかにした。スポーツマンは非スポーツマンに比べ自己解放型の傾向が強く、特に個人競技者においてはその傾向が顕著に現れている。また、役職についている人は信念確信型の傾向が強いという結果が得られた。さらに、スポーツマンの性格には先天的な性格と後天的な性格の両方が存在している可能性が示唆された。これらの結果をふまえ、本研究ではスポーツによる良好な人間性構築方法を提案した。

2. はじめに

2020年に開催される東京オリンピックの影響もあり、近年日本ではスポーツに対する関心が高まっている。オリンピックが与える影響は大きく、経済効果は日本全体で30兆円規模になると予想されている。また、東京オリンピックが与える影響は経済効果だけではなく、選手の活躍や努力する姿は、私達に勇気や感動を与える。選手の姿を、メディアや競技会場で観ることで、スポーツを始める人もいるだろう。実際、表1に示すようにスポーツを始めたきっかけの一番高い割合が「憧れの選手がいて影響を受けたから」である[1]。また、スポーツを始めたきっかけが選手の影響だと回答した人の割合が高い、野球(51.5%)ゴルフ(29.6%)サッカー(24.3%)テニス(18.8%)バレーボール(14.1%)等は、オリンピック競技であり、東京オリンピックでの選手の活躍により、日本人のスポーツ人口は今後増加する可能性が高い。一方、スポーツが与える影響は始めるきっかけだけではなく、その後スポーツを通じてプレイヤー自身にも影響を与えてい

表1 スポーツを始めたきっかけ

| 順位 | きっかけ | 割合(%) |
|----|--------------------|-------|
| 1 | あこがれの選手から影響を受けたから | 16.2 |
| 2 | 好きな漫画・アニメの影響を受けたから | 15.2 |
| 3 | 好きなチームの影響を受けたから | 9.9 |
| 4 | 漫画・ドラマの影響を受けたから | 5.6 |
| 5 | ゲームの影響を受けたから | 2 |

表2 スポーツを始めたきっかけが憧れの選手と回答した割合(複数選択可)

| 順位 | スポーツ | 憧れの選手(%) |
|----|----------|----------|
| 1 | 野球 | 51.5 |
| 2 | ゴルフ | 29.6 |
| 3 | サッカー | 24.3 |
| 4 | テニス | 18.8 |
| 5 | バレーボール | 14.1 |
| 6 | ソフトボール | 12 |
| 7 | 卓球 | 9.6 |
| 8 | 水泳 | 6.9 |
| 9 | バスケットボール | 3.4 |
| 10 | スキー | 3.2 |

る。スポーツの意義の中には、「青少年の健全育成」がある[2]。スポーツは青少年の心身の健全な発達を促すものであり、特に自己責任、克己心やフェアプレイの精神等を培うものである。また、仲間や指導者との交流を通じて、青少年のコミュニケーション能力を育成し、豊かな心と他人に対する思いやりの心を育むものである。このようにスポーツは人格形成に大きな影響を与えていると考えられる。私自身、小学生のころからスポーツを続けてきており、スポーツを通して心身を成長させてきた。厳しい練習で忍耐力を磨き、他校の生徒と関わることでコミュニケーション能力を育み、先輩や顧問の先生と関わることで上下関係を勉強してきた。そして、仲間と励ましあいながら練習することで思いやりの心を身に付けてきた。スポーツは私たちに良い影響を与えていると身をもって感じてきた。一方でスポーツ界でのパワハラ問題、プロスポーツ選手や大相撲の力士が暴力事件を起こすなど、ス

スポーツ選手や指導者の不祥事が起こっていることも事実である。さらに、心身の健全な発達や思いやりを育む場であるはずの部活動でのいじめ問題も度々起こっている。このように、プロ選手や指導者、学校の部活動など様々な場面で、「スポーツの意義」と「実際にスポーツが与えている影響」の間に矛盾が生じている。東京オリンピックを間近に控えた今こそ、スポーツが私たちに与える影響を明らかにする必要がある。

3. 目的

本研究では、スポーツが人間性にどのような影響を与えているのかを解明し、スポーツによる良好な人間性構築方法を提案することを目的とする。

4. 研究方法

4.1 研究対象

本研究では、初めにスポーツと人間関係に関する先行文献の調査を行った。次に高知工科大生 63 人、他大学生 30 人に対して、KT 性格検査とスポーツ歴に関するアンケート調査を実施した。

4.2 KT 性格検査

KT 性格検査とは、ドイツの精神学者クレッチマー (Kretschmer, E. 1888-1964) の精神医学的性格類型に基づいて作成された、15 歳以上の人を対象とした質問紙による性格検査である。KT 性格検査は、「はい」「いいえ」「どちらでもない」で回答する 50 問の質問で出来ており、18 点満点の KT 評価点で評価される。性格検査では、対象者の性格を自己抑制型・自己解放型・着実型・繊細型・信念確信型の 5 つの類型に分類できる。表 3 は 5 つの性格特性の特徴をまとめたものである。

4.3 研究手順

初めに先行研究を調査し、次に KT 性格検査によるアンケート調査を実施することで、スポーツが人間性に与える影響を明らかにした。そして、スポーツの種類や役職の有無に

よって人間性に与える影響に違いはないか分析した。最後に、分析した結果からスポーツによる良好な人間性構築方法を提案した。

5. 結果

5.1 先行研究の調査

スポーツと人格形成の関係については、我が国では多くの論文が存在し、それらによるとスポーツは人格形成に様々な影響を与えていることが述べられている [3] [4] [5]。

表 4 は、天理大学生男子 334 名 (体育専攻生 181 名・非体育専攻生 153 名) に対して、細かな性格診断が可能な EPPS 性格検査を実施し、個人的性格について調査した結果である [6]。体育専攻生男子と非体育専攻生男子に、EPPS 検査を実施した結果、11 種の個人的性格の内 8 種の性格特性において違いが見られた。特に攻撃と変化では非常に差が開いており、体育専攻生は非常に攻撃性が強く、非体育専攻生は新しいことや変わったことに興味を示し、変化を好む性格であることが分かる。その結果、スポーツが個人的性格に及ぼす影響には、正機能ばかりでなく逆機能も存在すると結論を出している。

また、スポーツの種類によっても与える影響に差がある。図 1 は愛知工業大学生 91 名を対象に、スポーツ選手の心理傾向を調べることができる、心理的競技能力調査 (DICPA.3) を実施した結果である [7]。

愛知工業大学生の個人競技者と団体競技者に心理的競技能力調査を実施した結果、12 因子の内 11 因子で団体競技者の平均点が高く、心理的競技能力に優れている。また、協調性・忍耐力・闘争心・勝利意欲においては、団体競技者と個人競技者の心理的競技能力に大きな差がある。その結果、個人種目より団体種目の選手の方が、心理的競技能力が優れている可能性が示唆されたと、結論を出している。

人格形成へのスポーツによる影響を考える場合、各競技者

表 3 5 つの性格類型

| 類型 | 特徴 |
|-------|---|
| 自己抑制型 | 非社会的・静か・冷静・控え目で口数が少なく、人とは比較的距離をおいて付き合う |
| 自己解放型 | 社交的・善良・人と関わるのが好き・感情に左右されやすく気分で行動し、時に慎重さに欠ける |
| 着実型 | 礼儀正しい・粘り強い・忍耐力に優れている・約束や規則を誠実に守り義理堅いが、時に柔軟さに欠ける |
| 繊細型 | 感受性が強い・心配性で物事をマイナスに考えがちである・相手の立場を良く考えて行動する |
| 信念確信型 | 固い信念をもつ・負けず嫌い・自己主張が強い・頼りにされる反面、独断的で勝手だと思われやすい |

表 4 体育専攻生男子と非体育専攻生男子の個人的性格平均得点とパーセンタイル

| | | 達成 | 追従 | 秩序 | 攻撃 | 内罰 | 他者認知 | 救護 | 変化 | 顯示 | 持久 | 自律 |
|--------|-------------|----|----|----|----|----|------|----|----|----|----|----|
| 体育専攻生 | 平均得点 (四捨五入) | 13 | 11 | 10 | 14 | 14 | 14 | 14 | 15 | 14 | 14 | 15 |
| | パーセンタイル | 47 | 69 | 60 | 70 | 52 | 50 | 51 | 52 | 57 | 44 | 32 |
| 非体育専攻生 | 平均得点 (四捨五入) | 12 | 10 | 9 | 12 | 15 | 15 | 15 | 17 | 14 | 14 | 15 |
| | パーセンタイル | 37 | 61 | 52 | 52 | 59 | 58 | 57 | 69 | 57 | 44 | 32 |
| | 差 (パーセンタイル) | 10 | 8 | 8 | 18 | 7 | 8 | 6 | 17 | 0 | 0 | 0 |

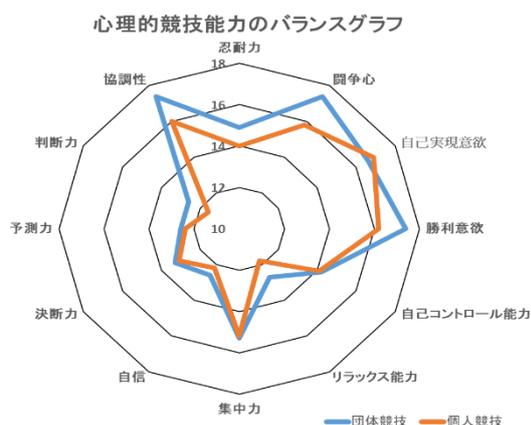


図 1 個人競技者と団体競技者の心理的競技能力各因子の得点グラフ

のスポーツへの関わり方には、個人競技者・団体競技者・役職の有無等様々なパターンがある。先行研究では、それらの人を一つの調査方法で研究した例はほとんどない。そのため、スポーツが各競技者の人間性に与える影響を明確にすることができていない。そこで本研究では、様々な形でスポーツに携わっている人を同一の調査方法で研究し、スポーツが人間性に与える影響を解明する。また先行研究のほとんどが、スポーツと人間性の関係を調査して終わっている為、本研究ではスポーツが人間性に与える影響を解明するだけでなく、スポーツによる良好な人間性構築方法を提案する。

5.2 KT 性格検査・アンケート調査の実施

高知工科大学学生 63 人、他大学生 30 を対象に KT 性格検査によるアンケート調査を実施し、4つの観点からスポーツが人間性に与える影響を分析した。

5.2.1 スポーツマンと非スポーツマンの比較

図 2 はこれまで部活動やクラブチームなどでスポーツをしてきた人(73 人)とスポーツをしてこなかった人(20 人)の 5 つの性格類型の平均値を表している。

スポーツマンと非スポーツマンの 5 つの性格類型を比べる

スポーツマンと非スポーツマンの性格類型比較

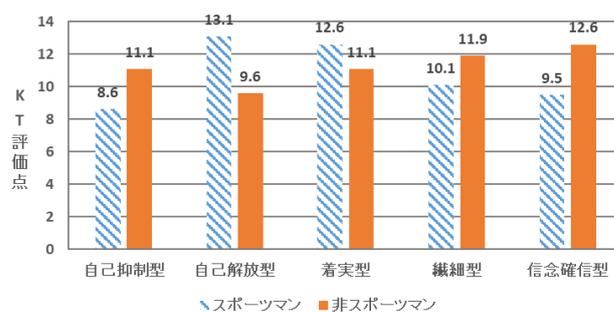


図 2 スポーツマンと非スポーツマンの性格類型比

と全ての性格類型の数値で違いがみられ、スポーツは人間性に影響を与えていることが分かる。スポーツマンでは、自己抑制型の数値が 8.6 で、自己解放型の数値が 13.1 であり、自己解放型の傾向が強い。これに対し、非スポーツマンは自己抑制型の数値が 11.1 で、自己解放型の数値が 9.6 であり、自己抑制型の傾向が強く、両者の人間性には大きな違いがある。また、着実型ではスポーツマンの数値が 12.6、非スポーツマンの数値が 11.1 であり、スポーツマンの方が着実型の傾向が高い。繊細型・信念確信型では非スポーツマンの数値の方が高いという結果になった。特に信念確信型では、スポーツマンの数値が 9.5、非スポーツマンの数値が 12.6 であり、非スポーツマンの方が信念確信型の傾向が非常に強いという結果になった。

スポーツマンと非スポーツマンの性格類型では様々な違いが見られたが、特に自己抑制型・自己解放型で顕著な差がみられ、スポーツは人間性に影響を与えていることが実証された。

5.2.2 個人競技者と団体競技者の比較

図 3 は個人競技者(46 人)と団体競技者(27 人)に「あなたはスポーツを通して自分の性格が変化したと思いますか」という質問をした回答結果である。

「あなたはスポーツを通して性格が変化
したと思いますか」についての回答

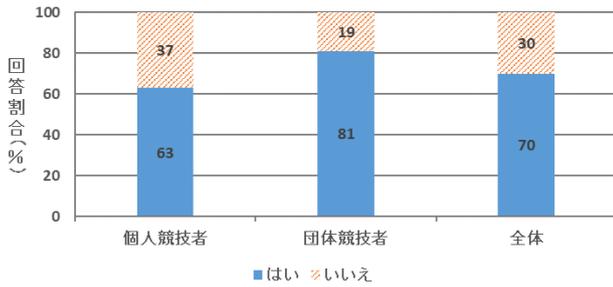


図3 スポーツを通して性格が
変化したかについてのアンケート結果

「あなたはスポーツを通して自分の性格が変化したと思いますか」という質問に対し、個人競技者では63%の人が「はい」と回答し、団体競技者では81%の人が「はい」と回答した。全体では70%の人が「はい」と回答する結果となり、高い確率でスポーツは人間性に影響を与えていると考えられる。図4は個人競技者(46人)と団体競技者(27人)の5つの性格類型の平均値を表している

個人競技者と団体競技者の性格類型比較

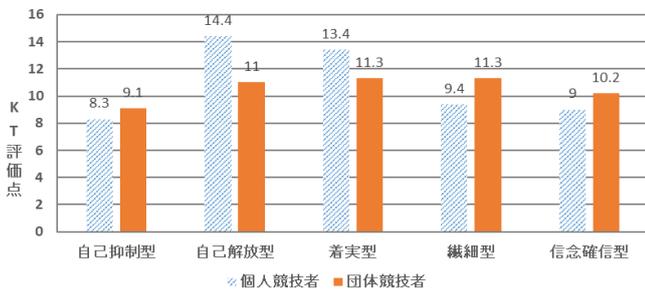


図4 個人競技者と団体競技者の性格類型比較

個人競技者と団体競技者の5つの性格類型を比べてみると全ての性格類型の数値で違いがみられ、個人競技と団体競技では、人間性に与える影響が異なることが分かる。自己解放型・着実型では個人競技者の数値が高く、自己抑制型・繊細型・信念確信型では団体競技者の数値が高いという結果になった。特に、自己解放型・着実型では両者の数値に大きな違いがみられた。自己解放型では、個人競技者の数値が14.4であるのに対し、団体競技者の数値は11である。そのため、個人競技者の方が自己解放型の傾向が非常に強いことが分かる。また、着実型では、個人競技者の数値が13.4、

団体競技者の数値が11.3であり、個人競技者の方が着実型の傾向が強い。

個人競技者と団体競技者の性格には様々な違いが確認できた。特に、自己抑制型と自己解放型では大きな差があり、個人競技と団体競技では人間性に与える影響が異なることが実証された。

5.2.3 役職有と役職無の比較

図5は部活やクラブの中で、主将・副主将・主務などの役職についている人(24人)と何も役職についていない人(49人)の、5つの性格類型の平均値を表している。

役職に就いている人と役職に
就いていない人の性格類型比較

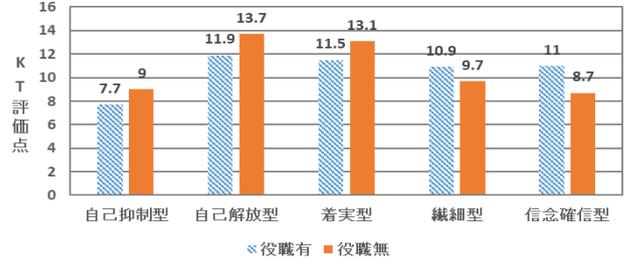


図5 役職の有無による性格類型比較

部活やクラブの中で、役職についている人と役職についていない人の5つの性格類型を比べると、全ての性格類型で違いがみられ、役職の有無によって人間性に与える影響の違いがあることが分かる。自己抑制型・自己解放型・着実型では役職有の人より役職無の人の数値の方が高かった。また、繊細型・信念確信型においては役職無の人より、役職有の人の数値の方が高かった。信念確信型においては、役職有の人の数値が11、役職無の人の数値が8.7であり、役職有の人の方が信念確信型の傾向が非常に強い。

役職に就いている人と役職に就いていない人の性格類型を比べると、全ての性格類型で違いが見られた。特に信念確信型では大きな違いがみられ、役職の有無は、信念確信型に非常に影響を与えていることが実証された。

5.2.4 スポーツ活動の年数別の比較

図6は、スポーツ活動をしてきた年数が、5年以下の人(5人)・6年以上10年以下の人(31人)・11年以上の人(37人)の3つに分け、5つの性格類型の平均値を比較したものである。

性格類型に関するスポーツ活動の年数別比較

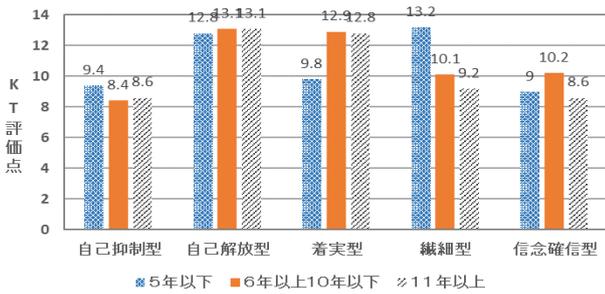


図6 性格類型に関するスポーツ活動年数比較

スポーツ活動の年数別に、5つの性格類型を比べると、自己抑制型・自己解放型ではあまり違いは見られなかった。一方、着実型・繊細型・信念確信型においてはスポーツ活動の年数の違いが、人間性に影響を与えていることが分かった。着実型では、スポーツ活動歴が5年以下の人の数値が9.8であるのに対して、6年以上10年以下の人の数値は12.9、11年以上の人の数値は12.8であり、スポーツ歴5年以下と6年以上の間に大きな差があることが分かった。また、繊細型ではスポーツ歴5年以下の人の数値が13.2、6年以上10年以下の人が10.1、11年以上の人が9.2であり、スポーツ歴が長くなるごとに繊細型の傾向は弱くなっていくことが分かった。信念確信型においては、スポーツ歴5年以下の人の数値が9、6年以上10年以下の人の数値が10.2、11年以上の人の数値が8.6である。信念確信型の傾向は、6年以上スポーツを続けると強くなるが、11年以上続けると、減少するという結果になり、一貫性は見られなかった。

スポーツ活動の年数別に性格類型を比べると、5つのうち3つの性格類型において違いがみられ、スポーツ活動の年数によって、人間性に与える影響が変化するものとそうでないものの両方が存在することが分かった。繊細型ではスポーツ活動年数が長くなるほど、その傾向が弱くなっており、スポーツ活動の年数によって人間性に与える影響が変化するという結果が顕著に表れた。

6. 考察

アンケート調査の結果から、スポーツが人間性に与える影響について考察した。

6.1 スポーツマンと非スポーツマンの比較

スポーツマンと非スポーツマンの性格類型には、様々な違いがみられ、スポーツは人間性に影響を与えていることが分

かった。スポーツマンは、自己解放型の傾向が非常に強く、繊細型の傾向が弱い為、社会的で周囲の人と気軽に付き合い、楽観的で陽気な性格の人が多く。一方で、人に対してあまり気を使わず感情で行動しがちな為、慎重さに欠け、軽率な行動をとってしまいやすい。また、スポーツマンの自己解放型をスポーツ活動の経験年数別に比べてみるとほとんど数値が変わっていない。そのため、スポーツマンはスポーツを通して自己解放型の傾向が強くなるのではなく、元々自己解放型の傾向が強い人がスポーツを行うと考えられる。したがって、先天的に自己解放型の傾向が強い人は、スポーツを始める可能性が高いとも言える。

一方、繊細方においては、スポーツ歴が長くなるほどその傾向が弱くなるという結果が得られた。この結果から、元々スポーツマンは繊細な性格であるが、スポーツを続けるうちに繊細な性格ではなくなっていくと考えられる。そのため繊細型は後天的な特性である可能性が高い。

スポーツマンは、非スポーツマンに比べ自己解放型の傾向が強く繊細型の傾向が弱いという傾向が見られ、スポーツマンと非スポーツマンは相反する性格をしていることが分かった。また、スポーツマンの性格特徴には、先天的な性格と後天的な性格の両方が存在していると考えられる。

6.2 個人競技者と団体競技者の比較

個人競技者と団体競技者の性格類型には様々な違いが見られ、個人競技と団体競技では、人間性に与える影響が異なることが分かった。特に自己解放型では大きな違いが見られた。スポーツマンは元々自己解放型の傾向が強いが、個人競技者は団体競技者に比べその傾向がさらに強い。そのため自己解放型の傾向が非常に強い人は、個人競技を選ぶ可能性が高いと考えられる。個人競技者は、チームで戦うわけではない為、試合中も自分だけでプランや作戦を決めなければいけない。そのため、自分の感情や直感で行動しやすい自己解放型の傾向が強いのかもしれない。しかし、団体競技のように、チームで一つの意味決定をするという機会が少ないため、慎重な行動や、相手の気持ちを考えたうえで自分が行動するという、思いやりの気持ちに欠ける可能性がある。また、着実型においても個人競技者の平均値の方が、団体競技者より高い。そのため、個人競技者は粘り強く、持久力や忍耐力に優れており、一つの事を最後までやり抜く傾向がある。これは、誰に

も頼ることが出来ず、自分自身の力だけで戦わなければいけない個人競技の特徴だと考えられる。

繊細型においては団体競技者の平均値の方が、個人競技者の平均値より高い。そのため団体競技者は、相手の立場をよく考えて行動することが出できる反面、心配性で物事を深く考えすぎてしまう傾向がある。団体競技者は、チームで戦うため、仲間のことを第一に考え行動や発言をするため思いやりのある性格になりやすいと考えられる。また、スポーツ歴が長くなるほど傾向が弱くなる繊細型の数値が、団体競技者より個人競技者の方が低いため、個人競技は団体競技より、人間性に与える影響が大きい可能性が示唆された。

個人競技者と団体競技者の性格類型を比べると、自己解放型・着実型・繊細型において大きな違いが見られ、いずれも個人で戦う競技とチームで戦う競技の特徴が顕著に出ており、スポーツの種類の違いによって、人間性に与える影響は大きく変化すると考えられる。

6.3 役職有と役職無の比較

部活やクラブの中で、役職に就いている人と、何も役職に就いていない人の性格類型には様々な違いが見られ、役職の有無は、人間性に影響を与えていることが分かった。特に、自己解放型、信念確信型では大きな違いが見られた。自己解放型においては、役職に就いている人より、役職に就いていない人の方が、その傾向が強い。元々、スポーツマンは自己解放型の傾向が強いが、役職に就くことで責任感を抱くようになり、自分の考えで自由に行動することは少なくなるため、その傾向が弱くなると考えられる。一方、役職に就いていない人は、抱える責任が少なく自由に行動することが出来る。そのため、周りのことをあまり考えず、自分の感情や気分で行動しやすく、自己解放型の傾向が強いという特徴が生まれたのではないだろうか。

一方、信念確信型においては役職に就いていない人より、役職に就いている人の方が、その傾向が非常に強い。スポーツマンと非スポーツマンの信念確信型の数値を比べると、スポーツマンの数値が低かったが、役職に就いていない人が平均値を下げていたことが分かった。役職の有無による、信念確信型の数値の違いは、リーダーシップの有無によって起こると考えられる。役職に就いている人は、チームの方針・練習メニュー・練習の日程など、様々なことを決定し、それを部

員に指示しなければいけない。また、部員が問題を起こした時には、叱り、正しく指導しなければいけない。そのため自主性が強く、リーダーシップに優れ、周りの人から頼りにされるようになることで、信念確信型の傾向が強くなるのだろう。その反面、全ての決定権は自分にあり、自分の思い通りにチームの方針や部員の行動を決めることができるため、周りに指示をするばかりになり、独断的なリーダーになってしまう危険がある。周りに意見を押し付けるのではなく、周りの意見を聞き、まとめられるリーダーとなれるように気を付けなければならない。

役職に就いている人と役職に就いていない人の性格類型を比べると、自己解放型・信念確信型では非常に差があり、役職に就くことで、リーダーシップが身に付く等、役職は人間性に良い影響を与えていると考えられる。一方、独断的なリーダーになってしまう恐れもあるため、気を付けなければならない。

7 提案

今回、KT 性格検査・アンケート調査を通して、スポーツが人間性に与える影響について調査した結果、スポーツは人間性に様々な影響を与えていることが分かった。また、競技の種類や役職の有無、スポーツをしている年数によってスポーツが人間性に与える影響は異なることが分かった。さらに、その影響には良い影響だと考えられるものと、悪い影響だと考えられるものが存在している。そこで、本研究ではスポーツが人間性に与える様々な影響を利用し、スポーツによる良好な人間性構築方法について、2つの提案をする。

7.1 スポーツが人間性に与える影響を知ること

1つめの提案は「スポーツが人間性に与える影響を知ること」である。例えば、スポーツを行う人は自己解放型の傾向が強く、自分の直感や感情で行動しがちになる。そのため周りへの配慮や思いやりのある行動に欠けることが多々ある。特に、個人競技者はこの傾向が強い。スポーツを好む人はこのような傾向が強くなるということを知っていれば、行動する前に周りの考えや気持ちを考えて行動することが出来るだろう。知っていなければ、気を付けることさえできない。また、選手だけではなく指導者にとっても「知ること」は大切だろう。例えば繊細型においては、スポーツ歴が長くなるほどその傾向が弱くなるという特徴がある。そのためスポーツ

歴が短い人はその傾向が強く、心配性な特徴があり、思い切ったプレーがなかなかできない。特に、団体競技者は繊細型の傾向が強いため、チームメイトのことを考えすぎて縮こまってしまい、本来の実力が出しにくい。このことを指導者が理解していれば、競技経験の浅い選手には、堂々としたプレーや思い切った攻撃が出来るようなアドバイスをすることができる。また、日ごろの練習のメニューや指導も変わってくるかもしれない。選手にとっても指導者にとっても、スポーツが与える影響を知ることで、人間性に与える影響は大きく変わってくるだろう。

7.2 責任を分散するチーム作り

2つめの提案は「責任を分散するチーム作り」である。KT 性格検査によるアンケート調査の結果から、部活やクラブでの役職の有無が人間性に影響を与えていることが分かった。役職についている人は信念確信型の傾向が非常に強く、リーダーシップに優れており、役職は人間性に良い影響を与えているといえる。一方で役職に就いていない人は、抱える責任がないため、自分の考えで自由に行動でき、自己解放型の傾向が非常に強い。すなわち、責任感を持って何かに取り組むことは、人間性に良い影響を与えられ、そのため私は、責任を分散し、チームのみんなが、小さな責任を持つことが非常に大切であると考え、役職に就いている人は、チームの方針・練習メニュー・練習の日程・他校との連絡・お金の管理など様々なことを考え、決定する責任があり、抱える負担も大きい。これらのたくさんの役割をチームのみんなまで分担し、みんなが小さな責任を持つようにし、最終決定を役職に就いているリーダーが行うようにすれば、それぞれが責任感を持つことが出来る。このようなチーム作りをすれば、本来は役職に就いている人が与えられる良い影響を、チームのみんなが少なからず受けることができ、さらにチームの結束力を向上させることが出来るだろう。また、みんながそれぞれの役割を担うことで、リーダーだけが大きな負担を抱えることもなくなり、独断的なリーダーになってしまう恐れも低くなるだろう。

8. 結論と今後の展望

8.1 結論

本研究では、KT 性格検査・アンケート調査を用いて、スポーツが人間性に影響を与えていること、そして個人競技と団

体競技での違い・役職の有無やスポーツ経験年数の違いなど、様々な要因でスポーツが与える影響は異なることを、初めて同一の方法で実証した。さらに、スポーツマンの特徴には、先天的な性格と後天的な性格の両方が存在することを明らかにした。これらの結果をふまえ、「スポーツが人間性に与える影響を知ること」「責任を分散するチーム作り」の2つの、スポーツによる良好な人間性構築方法を提案した。

8.2 今後の展望

KT 性格検査によるアンケート調査を実施し、スポーツが人間性に影響を与えている可能性が非常に高いことを証明することができた。今後はスポーツの種類による影響や男女の差異について調査していくことが課題である。

また、本研究ではスポーツが人間性に与える影響を利用し、スポーツによる良好な人間性構築方法を提案した。この提案を、自分がスポーツをする際や指導するときに、意識して取り組んでいきたい。

謝辞

本研究の遂行と論文作成にあたり、ご指導・ご助言を頂きました高知工科大学経済・マネジメント学群林一夫教授に心より感謝し厚く御礼申し上げます。また、貴重な時間を割いてアンケートに協力して頂いた、高知工科大学生の皆様、福岡大学・西日本工業大学・広島大学・福山平成大学・松山大学のソフトテニス部の皆様にも厚く御礼申し上げます。さらに、互いに励まし合った研究室の仲間たちへ向け、この場をかりて御礼申し上げます。

【参考文献】

- [1] 産業能率大学スポーツマネジメント研究所 2013年6月
調査報告書 p1-12
「運動部経験者に尋ねたスポーツを始めたきっかけ」
<https://www.sanno.ac.jp/admin/research/vbnear000000kx-att/sports2013.pdf>
- [2] (スポーツ振興基本計画 1 総論)
- [3] スポーツ教育学研究 第4巻 第2号 P101-111 昭和
60年6月 丹羽劭昭 (奈良女子大学)長沢邦子 (同上)北田
明子
(名古屋大学教育学部附属中学・高等学校)
「女子剣道選手の精神的特性-不安傾向やあがりを中心に」
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjses1982/4/2/4_2_101/_pdf/-char/ja
- [4] 岡山県立短期大学紀要 36巻 145-154頁 (1991)
スポーツ選手の人格構造Ⅲ -スポーツと性格形成-
https://oka-pu.repo.nii.ac.jp/index.php?active_action=repository_view_main_item_detail&page_id=29&block_id=64&item_id=1923&item_no=1
- [5] 国士舘大学 体育研究所報 第1巻 P19-P25 (1980)
「スポーツマンの性格特性」横山将剛 笠井達哉
https://kokushikan.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=5286&item_no=1&page_id=13&block_id=21
- [6] 天理大学学報 第36号 p68-90
林 正邦「スポーツと人間形成について」
<https://opac.tenri-u.ac.jp/opac/repository/metadata/1571/GKH014605.pdf>
- [7] 愛知工業大学研究報告 第42号A平成19年 p53-57
岡本昌也 高津浩彰 寺田泰人
「個人種目選手とチーム種目選手の心理的競技能力」
<http://aitech.ac.jp/lib/kiyou/42A/A09.pdf>
- 金子心理研究所 編
「KT 性格検査実施マニュアル No. 883」
- 金子書房 精研式 「パーソナリティ・イベントリイ」
手引き [第3版] 金子勝男・楨田仁 坂部先平